渋沢敬三の資料学への展望

崔　吉城

趣旨

佐野賢治、本シンポジウム実行委員会委員長の「趣旨説明」と副学長の齊藤隆弘氏によるごあいさつ、渋沢敬三のご子息である渋沢雅英氏の祝辞を聞いて、私は「渋沢敬三の資料学：多角的な視点」の総合的な研究方法での共同調査、その調査が遺した資料：文書、写真・映像、レントゲン撮影、記録、漁民史料、民具などを多角的な視点から検討をするということがポイントであると認識した。シンポジウムはヨーゼフ・クライナー氏の基調講演から始まり、夜の懇親会まで議論が続き充実した会議であった。

内容

第一、渋沢敬三は民具をめぐる生活文化に関心を持った先駆者であり、民具など物質文化の研究において大きな業績を残した。ヨーゼフ・クライナー氏は「ヨーロッパにおける日本関係コレクション―美術・工芸から民具へ―」という題で西洋人の日本文化への意識の変化、日本の美術・工芸品が支配者、資本家の骨董陳列室や宮殿などに収められ、ステータスのシンボルとして高く評価されたが、近世後半になってから公の博物館で展示されるようになり、日本の日常生活で使われる道具（民具）を通じて「日本」という国や、その文化を理解するようになったことを述べた。つまり工芸から民具や生活文化の変化に注目したのである。実際の日本の社会、歴史、文化を、社会科学的・民俗及び民族学的な立場から取り上げた渋沢らのようなアプローチ、つまり文字資料と並んで、絵画等に描かれたものも研究の視野に入れるビジュアル・アプローチが現われ、柳宗悦や今和次郎、柳田国男などが常民文化への関心を高めていたのである。

曹幸穂氏は「伝統的農具にみる中国農民史」で特に中国における農具と農民の関係や地域性などについて述べ、常民の日常生活において必要不可欠な生活実用品としての「民具」と美的装飾品なる「民芸」「官具」とは本質的には区別されるものであるが、生活実用品に美的な情趣が加わり、彫刻・絵画・造形・色彩などにこだわったものが民芸となり、さらに持ち主が宮廷貴族になれば「官具」として尊貴・豊かさと繁栄が示される。そしてそれはしばしば貴重な工芸品として作られていた。つまり「民具」と「民芸」は異なるが共存するという指摘は貴重である。

民具を単に美的にみる視覚の民芸化現象もあることを指摘した。クライナー氏が民芸から民具へと、曹氏は民具から民芸へと述べたことは対照的な点であり、あるいはその調和とも感じられる。

第二、渋沢の調査方法・合同調査に関するものであるが、渋沢は人脈が広く、アチックミューゼアムのメンバーたちと共同で調査や研究を進めて、多くの調査資料を残した。特に小川徹氏が民家の民具を総体的に調査し報告した、「南朝鮮の一農村における村落生活と民具について―1936年慶尚南道蔚山邑達里調査個人報告」（『民族學研究』21(4)：259-269、1957年）が注目される。宮本端夫氏は「映像に見る常民生活の伝統と再生」で渋沢を始め折口信夫、早川孝太郎、今和次郎らの一行による「花祭」の映像が残っていて、特に1936年7月～8月中旬に行われた朝鮮の蔚山と西海の多島海調査は映像（写真、動画「朝鮮多島海探訪記」）と報告書（『朝鮮の農村衛生：慶尚南道達里の社会衛生学的調査』岩波書店 1940）や日記などが残っていることを指摘した。

最近、崔吉城はすでにその映像を韓国で紹介している。渋沢グループの調査資料と映像などに基づいて追跡調査を行って、『日本民俗学者がみた1930年代西海民俗』（韓国語訳2004）の訳書と『映像が語る植民地朝鮮』（2009両書とも民俗苑）で映像を分析しており、李文雄は姜鋌澤の論文集『植民地朝鮮の農村社会と農業経済』（2008）などの訳書を出した。さらに言うならば植民地朝鮮での農村調査の先行研究も多い。善生永助などの朝鮮総督府調査資料と生活状況調査や鈴木栄太郎の農村社会調査、秋葉隆の同族部落調査などは1930年代の朝鮮の農村調査の渋沢資料とはどのように関連付けができるのだろうか。現時点での韓国の農村社会を理解する上で崔順權氏の「農村の生活文化調査と持続的な記録の必要性—全羅南道長興郡上金（チャンフングンサングム）マウルの事例を中心に—」は広い意味で渋沢資料学の比較として見るべきであろう。

福岡正太氏の「音盤に聴く東アジアの音楽交流—日本コロムビア外地録音資料を例に—」は渋沢のドキュメンタリーは映像、映画などを活用する調査研究の可能性を示唆するものとして新しい視野を提供している。テレビがなかった時代はラジオ放送やレコード、映画なども視野に入れるべきであろう。当時、録音テープの利用についての情報は乏しい。20世紀前半には、録音技術の発達およびレコードやラジオなどのマスメディアの普及により、音楽を生み出し楽しむための新しい方法が急速に広がった。欧米発のポピュラー音楽が世界各地で楽しまれるようになり、これらの影響を受けた新しい音楽が生み出されるとともに、伝統的な音楽にも大きな変化が訪れた。この時期、東アジア諸地域では、どのような音楽が生み出され、どのように楽しまれていたのか、またそこには日本による支配がどのような影を落としていたのか。日本コロムビア外地録音資料は、この疑問に答える重要な資料である。

サイレント映画の主題歌のレコードを資料化するという指摘は正しく、斬新である。私は日本コロムビアレコードで「金色夜叉」の韓国語版を聞き楽しんだことがある。サイレント映画時代でもレコードはその映画の主題歌として画像とストーリーを残している。日本コロムビアが朝鮮や台湾でレコードを製作し、現地の音楽家が日本の音楽界で活躍することにより、帝国の枠の中での内地と外地の制作や交流関係があったことに福岡氏は触れている。帝国の中の交流が現在のグローバル化現象とはどう異なるのか。ここで帝国化とグローバル化を比較したらどうだったのだろう。つまり帝国の枠の中の国際化、国家という枠を超えていく国際化現象は似て異なる。両方は戦前と戦後の連続と断絶という相互に深い結びつきがあることも指摘しておきたい。

1930年代半ばから映画音楽と主題歌や慰問公演などの資料が発掘されており、評者はそれを福岡氏に資料化することを強く勧めたい。たとえば日本帝国の帝国歌手といわれる李香蘭の活躍にも注目すべきであろう。それはラジオ放送における音楽も対象になるであろう。こうした研究は、発表者が触れたようにそれぞれの地域の研究者が単独で研究してもなかなか進まないだろうと思う。複数の地域の研究者が共同で研究を進めていくことを強く希望する。それには上述したように代表的な先行研究が検討されることも望ましい。

第三、ジョセフ・キブルツ氏は日本において文化人類学的現地調査の中で目にした民具のお札をテーマにして「お札（ふだ）の世界—世界のお札（ふだ）」を発表した。彼は生活文化の中で民間信仰、呪術的なお札に注目し、「お札」が実用的な民具ではなく、象徴的な呪術的民具であるとして、その意味を探って比較した。呪術的な魔よけのような札をめぐる民俗、宗教、農村の生活文化の統合性を見つけ、常民の生活に、モノが生きていることまで視野を広げている。札は札（さつ）として銀行へ繋がり、共有の思想まで広がったと指摘し、さらに西洋文化の比較もなされ、まさに「〈お札の世界〉は誠に広いといえよう」と述べた。

展望と提案

このシンポジウムでは渋沢の話が少なかったが、渋沢の陰徳（おかげ）を強く感ずる場であったと言える。シンポジウムの発表者たちはさほど趣旨を意識せず、それぞれ発表がなされた感がないわけでもない。しかし評者は「趣旨説明」の「国際的な常民文化研究の展開、人類史まで新たなパラダイムの構築に資する論議が行われる場になれば」と願っていた。また、評者自身が日常史構築の具体的方法論として渋沢の、フィールドワークにおいて多角的な視点による総合的な共同研究の必要性という言葉にこだわり過ぎていた感があった。

渋沢の調査方法や残した成果は現時点においてどのように位置づけができるであろうか。参考になり、考察すべき点は多い。まず1930年代の生活文化の構築を試みるべきであろう。渋沢の主に農村と漁村での調査から当時の都会の文化はどうだったのであろうか。日本は当時植民地を多く抱えており、調査地つまり内地と外地との状況はどう異なっていたのだろうかなどと考えたくなる。その生活文化の調査資料は膨大に残っている。それらとの照応はどうであろうか。たとえば台湾と朝鮮の総督府、満州映画協会製作の映像や写真、記録などをもって総合的に当時の生活文化を構築して理解し、評価できると考えており、それらの中で渋沢の資料の正しい評価がなされると思っている。

次に渋沢の調査方法から学ぶべき点である。1か所の調査においてもインタビュー、記録、映像などによる多様な機材や方法を動員して行っており、それは戦後も学際的な研究方法として多くの研究者によって試みられたものであり、複数の学会の連合調査、特に和歌森太郎氏グループが韓国で行った調査方法も検討すべきであろう。寄せ集め式の学際的研究の問題点を反省する上で渋沢が人間関係を構築してから共同調査研究をしたという点から学ぶところは多い。本シンポジウムもその人間関係の構築の上、成り立った発表会として評価される。それを発展的に進めるためにも中国や韓国からも比較の視点が望ましい。

最後に渋沢の業績に対する称賛、脚光を浴びせていることは良いが、理解をより深める必要がある。渋沢などが先進的な方法で調査をし、残した貴重な映像などの資料はつい最近まで眠っていて、研究資料としてそれほど活用されなかった。映像資料などを多く所蔵している神奈川大学日本常民文化研究所にその資料をより総合的に分析検討することを提案する。文化人類学では早くから写真や映像を利用することができても文字報告書が中心になっており、写真や映像は飾りのように積極的に活用しようとはしなかった。神奈川大学日本常民文化研究所において映像と写真、文書などを総合的に活用することを願っている。